酔狂で始まったまちづくり

楽

松井義武さんと上下町並みづくり研究会

ついていくだけじゃけぇ

「みんながいろいろやってくれる」とさらっと言ってのける松井さん。御年、85歳。毎月広島市で開かれる同窓会に参加されるという元気な方である。

松井さん自身は、謙遜してそう言われるが、会が企画する行事を町の人に了解してもらうため、頭を下げて回られる。松井さんが言うなら・・・と町の人も承知するのである。

上下のまちづくりの裏話を聞くと、止まるところを知らない。後から後から出てくる。しかも楽しそうに語ってくださる。自らがまちづくりを楽しんでいらっしゃるのが、その語り口からも伺える。

楽しいまちづくり

それは今から36年前のある飲み会での話に遡る。

「まちをもっと楽しゅうする面白いことを考えようや～」元青年団の若手から声があがった。

まちには天領時代に繁栄した面影とともに、上下人気質ともいえる〝金とお天とう様はついてくる〟というおおらかな気風がみられる。これが数々の奇想天外な発想を現実のものにしてきたエネルギーの源になっている。

また、スーパーマーケットの入り口には「どうぞ道をお尋ねください」「トイレをお使いください」という看板がある。やさしさのある町でもある。

アイデアを生かした奇抜な取り組み

街路灯のポール塗り、日本一のクリスマスツリー（翁山）街頭劇の上演、芝居小屋（翁座）の復活、町民が勝手に表彰する「町並み景観賞」、なまこ壁*講習会の開催、ツチノコ探し等々取り組みはどれも生き生きとしている。

〝欽ちゃんが上下にくる！〟「欽ちゃんに人力車に乗ってもらおう」「人力車はどうする？」こんな時150万円で人力車が売りに出ていると、飛騨高山から電話してきた若者。「今なら半額で譲ってもらえそうだ。約束するぞ！」と矢の催促。当時、手元の金は20万円しかない。「じゃ～、仕方ない金の段取りは後で…」と即断即決。

後日、町民に呼びかけ寄付金を募ったところ80万円も集まった。上下人気質の面目躍如たる物語である。

山に灯りが。なにやら楽しそう・・・

ツチノコ探しは、町の人から「居もしない生き物で観光客を誘致するとは」という批判を浴びて頓挫した。しかし、それで終わらなかったのが、この会の元気なところ。同じ年の暮れには、もう別の面白いことを思いついて、しかも実行してしまうのである。

上下が寂しいから、なんか面白いことをやって、他所から人にきてもらおうと「過疎を逆手にとる会イン上下」をやろうということになった時のことである。

*なまこ壁：土蔵・塗屋などの外壁に方形の平瓦を貼り、その目地を漆喰（しっくい）でかまぼこ形に盛り上げた壁
*欽ちゃん：タレントの萩本欽一さん

多くの人に来てもらうには「過疎を逆手に〜」というタイトルでは面白くない。もっと面白いキャッチフレーズをと「過疎逆（かそさか）は、マツタケに勝てるか」というタイトルを考えた。

まちづくりについてマツタケ鍋をみんなで食べながら「ミニコミはマツタケに勝てるか」を語ろうと翁山山頂に集まった。それを見た町の人が「今日は何があるんじゃろうか。翁山に灯りがついて、えらいきれいじゃ。」と言われたのが、日本一のクリスマスツリーを作るきっかけとなった。

「翁山クリスマスツリー作ろう！」のアイデアに一同大賛成。早速電気工事会社に相談したら、「そんなことはできない」と断られた。それでもあきらめることなく、電気の仕事をしていた人に相談してみた。「やる気になったらできる」そういわれ、お金はないけどやってみることにした。

「資金のあるやつは資金をだそう。知恵のあるやつは知恵をだそう。何もないやつは元気を出そう」と、町の人達に呼び掛けた。一口千円。電球を提げる作業には60〜70人集まった。

だが山頂から80メートル下まで木の枝の上に電球を下げるのは至難の業。試行錯誤の末、ガイドロープを先に渡し、電球付の電線を引っ張るという苦肉の策でようやく実現した。

あまりの大変さに〝もうイヤだ！〟と言う声もあったが、結局20年続いた。

ゆるやかな取り組み

町並み整備では古い町並みと建造物を残し、多くの観光客を呼び込むところが多い。（宮島、鞆、竹原、石見銀山等）

しかし上下町の取り組みは、あくまで〝町並みづくり〟であり、家の造作をする際には「なまこ壁にしよう」「室外機等は板などで囲いをつけよう」「のれんをさげよう」という緩やかな取組であり、見た目の古さを保つことに力点をおいている。

明治の作家、田山花袋の「蒲団」に登場する〝警察署の火の見やぐら〟は、今も外観が保存されている。

この店を改装しようとした当時、この建物の所有者は、新しいものを取り入れて機能的な建物に変えることを考えていた。

しかし、松井さん達に、外観を保存するよう説得された。改修費も予定より多くかかるので大変困惑したが、結局町並みづくりに協力することにした。その結果、古いものを残したということで、完成後は、マスコミ各社が取材に来て、宣伝費をかけずに宣伝効果をあげることができた。商売にも大いにプラスになったと述懐している。

小さな資料館が町中に

個人資料館の多さに、今も残る上下人気質をみることができる。

主なもので「メガネの真野（歴史的道具類）」「仙田商店（古仏と刺し子）」「時永酒店（酒器、醤油関連器具、資料の展示）」「末広商店（酒造資料の展示、骨董、土人形、等）」「スパー上下（切手博物館）「永井硝子店（頼山陽資料の展示）」「上下画廊（ギャラリー、骨董市）」非公開の「エクシードタクシー（ブリキのおもちゃ、マツダの古い自動車）」がある。

現上下歴史文化資料館は、元藤永金物店を改装したもので、資料館建設までは、岡田美知代の生家（田山花袋に師事、小説「蒲団」のモデル）として温存されていた。

このため資料館に、居室や資料などが引き継がれ再現することができた。

上下の町並みを眺めるだけなら、1時間くらいの滞在時間に終わるが、小さな資料館や、公の資料館があることで、上下での観光客の滞在時間が長くなっているという。

ようやくまちづくりの芽がめばえてきた

上下町で特筆すべきは住民先行型の取り組みであろう。住民の取り組みは、昭和47年有志25名が妻籠宿（長野県）の視察にいったときにさかのぼる。あれから36年たった。

まちには電線の地中化や十里堂辻広場（トイレと憩いの場）も完成し、資料館もできた。

一方、平成18年府中市に合併し、駐車場の支援打ち切りなど町時代の独自性のある行政支援にも陰りがみえ始めている。

たしかに活動の輪は増えたが、地域全体の高齢化と重なりグループ自体も高齢化してきた。

次の世代へのバトンタッチが気になるところだが、上下町では、頼もしい後継者達が育っている。上下歴史文化資料館のパワーあふれる女性スタッフの守本さんが言う。

「歴史国道に選定されたら、すぐに何か実行に移さなくてはと考えました。二番煎じでもええよ、やってみようや。で始めたのが、ひな祭り。やってみたらお客さんが来ちゃったんですよ。

これまで2月に上下に人が来るということがなかったんです。それが、ひな祭りをやったことで、来られるようになった。これからは季節ごとにイベントをやって、年中上下にきてもらおうと思っています。」

上下地区にぎわいづくりネットワークという組織もできている。町内の様々なボランティアグループ、農家の人達、いろんな団体がつながって白壁の町に観光客を呼びこんでいこうとしている。

平成18年ににぎわい創出検討事業報告書が出されてこれからの上下のまちづくりへのアイデアが出されている。好き勝手に出された意見だけど、否定せずに、全部やっていこうと考えているという。

まちの人が変わった

まちづくりには時間がかかる。しかし上下町では、着実な変化がみられる。町を歩く我々取材班に、目が会うと町の人々が「こんにちは」と声をかけてくれる。ようこそ、いらっしゃいという気持ちが伝わってくる。

メインストリートの薬局は最近改築したと紹介され、店の外から外観を眺めていると、薬局のご主人が、中庭を見せてくれるという。

後で聞くと、薬局のお客でもないのに、招き入れるということは今までなかったという。会の取り組みが、そこに住む人に着実に変化をもたらしている証拠である。知らない人でも、家にあるものをどうぞ見ていってくださいという気持ちが、町の人々に浸透してきている。

翁健康茶。これもその薬局が作ったもので、いままでまちづくりに関わるきっかけがなかったが、ひな祭りであまりにたくさん人が来るので、商品を開発して売るということを始められた。こうした物が出来るということは、画期的なことだという。

松井さんたちがまちづくりの土壌をゆっくり作ってきた活動がこういう形で芽ぶいてきている。

メインストリートで行事をやれば、沿道の店も出店するようになってきた。近隣の農家から野菜も並ぶ。町の人達が自主的に参加するようになったという。

上下は、観光地化されすぎていない。観光地にありがちな、映画のロケセットみたいな人工的な感じがない。住む人が直接、訪れた者に笑顔を向ける。

観光客がどんどん来ることよりも「わぁ、いらっしゃい」という気持ちを大切にして、ここへ来ればほっとする、また来ようかという気持ちになる、と言われることが大切だと考えている。

飲食店を経営していた岡田さんは、従業員には、とにかく人に親切に、特に観光客には親切にと指導したという。道を聞かれたら、外にでて地図と鉛筆を持って、示すようにと徹底した。ソフトのまちづくりは、お金をかけないでもでき、効果があるという。

よそから来た人を大切にするのは、その人達の目、上下のここが素敵というところを大切にしたい、という思いもある。よそからの人の意見は、日ごろそこに住む者が気づかない町の魅力と改善点を知らせてくれるからだ。「上下はいけいけでやってみて振り返ってみるとできている・・・というようなところがあります。これにもっと、分析力が出てくればもっとよくなる。これからは、コーディネートやプロデュースする人材が必要になってくると思います。」と歴史文化資料館の守本さん。

上下町は、点ではなく銀山街道の宿場町として、街道沿いの町と繋がりながら、面でさらにまちづくりを進めていこうともしている。

▼上下町並みづくり研究会

会長　松井　義武
広島県府中市上下町上下1061
TEL&FAX 0847-62-3024

上下

喜怒哀楽で語るまちづくり

この「市民活動まちづくり読本」は、感情の代表選手として「喜怒哀楽」を取り上げ、それを切り口として、人と活動を紹介することから始めました。

もちろん、一つの感情だけ存在することはありませんが、いろいろな感情が入り交じる中での象徴的な「喜」「怒」「哀」「楽」ととらえてください。

みんなと共有する「喜」がエネルギーとなった〝大森〟、大きく深い「怒」が熱い力となった〝ポップラ〟、祭りの後のような「哀」から次を模索する〝かよこ〟、底抜けの「楽」が日常に根づく〝上下〟。

これら象徴としての「喜」「怒」「哀」「楽」と絡み合った様々な感情の機微やまちづくり活動を、感じ取っていただければと思います。

まちづくりを含め、何かを生み出したり、育てたりするとき、発想や感性の大切さは、誰もが認めることでしょう。

では、その発想や感性は、何から生まれるかというと、個々人の経験や知識がベースになっているはずですが、そこに感情という、極めて人間的、動物的な要素が入り込んでいるのではないでしょうか。

例えば、芸能の誕生は、苦しみの中にあっても喜びや楽しさを求める感情が、公害の克服は、多くの人々の苦しみや悲しみ、怒りが、大きな要因になったはずです。

まちづくりのエネルギー

これまでは、非論理的ととらえられがちな、あるいはケンカの元と言える感情を切り口にまちづくりを語ることは、それほどなかったのではないでしょうか。

しかし、まちづくりに取り組んでいる様々な人から話を聞く中で、感情を抜きにその活動を語ることはできず、さらに、感情はまちづくりを進めるエネルギーであり、それを省察する道標の側面を持っていること、一方で、感情が活動の停滞や停止の原因となることも学びました。

換言すると、感情の結集や調和・調整、絡み合い、コミュニケーションの在り方が、まちづくり活動を左右するのです。

人生としてのまちづくり

まちづくりと感情が極めて深い関係にあることと同じように、活動にかかわっている人の生活の一部またはほぼ全体に、まちづくりが入り込んでいることを再認識しました。

それは、生き甲斐であったり、喜びであったり、悩みであったり、「まちづくりは人生だ」を実感することになりました。

また、取材の中では、「まちづくりが先ではない、どんな人生を送りたいのか、どんな暮らしが楽しいのかが大切」という話もうかがい、漠然と聞き心地のよい「まちづくり」という言葉を、周知のごとく使っていたことへの反省もありました。

なお、まちづくりというと、とても広い内容を含んでおり、個人個人によって、そのとらえ方は様々だと思います。

この本では、まちづくりの定義に重きをおいていませんが、紹介する活動などに関しては、「私的な利益や空間などを超える形で住民等(企業、NPO等を含む)が参加する、地域や人々の安心・安全、豊かさ、幸せにかかわる取組の中に入るもの」としておきます。